

奥塚正典 × 菊池省三

「ほめあうまち なかつ (HOME-MACHI)」を創造する

平成28年度、大分県中津市では「ほめあうまち なかつ (HOME-MACHI)」と名付けられた事業をスタートしました。これは、大分県の委託事業「人権教育総合推進地域事業」を受け、学校、家庭、地域の協働により、お互いに認め合う学校づくり、家庭づくり、地域づくりを推進するものです。市は、この事業の推進にあたり、菊池省三先生を中津市教育スーパーアドバイザーに委嘱しました。5月31日、奥塚正典中津市長から委嘱状が菊池先生に交付され、「学びたい教育のまち中津」を巡って対談が行われました。

■ほめることと叱ること

奥塚 菊池先生のごことは、職員からよくお聞きしております。私は、昨年の11月に市長に就任いたしまして、現在半年が経過しました。政策の中に、「学びたい教育のまち中津」を掲げています。今回、菊池先生に教育スーパーアドバイザーの仕事をお引き受けいただきまして、ありがとうございます。私たちが強く望んでいたことです。これから、どうぞよろしくお願いいたします。非常に期待をしています。

菊池 私は、33年間小学校の教壇に立たせていただきました。本当に多くの方から教えて

いただき、育てていただきました。おこがましい言い方になってしまいますが、学ばせていただいた分、何かの方法で恩返しをしないといけないということを思っていました。それが、こういう形で一つ実現するということは、とてもうれしいことでもありますし、名誉なことだと思っております。

奥塚 今回、事業として「ほめあうまち なかつ (HOME-MACHI)」がスタートしました。「ほめる」ということが前面に出ています。子どもたちを育てていく取り組みには、様々な方法があると思います。その中で、子どもたち本人が力をつけて伸びていくような、心も豊かになっていくような育て方



↑ 奥塚正典中津市長から、教育スーパーアドバイザーの委嘱を受ける菊池省三先生。

← 「ほめあうち なかつ (HOME-MACHI)」推進事業がスタートしたことを伝える中津市のホームページ。
<http://www.city-nakatsu.jp/>

は、どういったものかと考えていました。ある意味、その目的が達成されるのであれば、方法は構わないとも思っていました。子どもがもっている価値観だとか、子どもが考えていることをしっかり聞いてあげて、それを伸ばしていくということを考えると、やはり「ほめる」という方法が良いと考えました。そして、単に「ほめる」ではなく「ほめあう」ですから、お互いにコミュニケーションをとっていくという意味もあると理解しています。ただ、私の中には、ほめるだけではだめだという意識もありまして、愛情をもって叱るということも、ほめることの要素の一つではないかという考え方をしています。

菊池 ほめるも叱るも、育てるということでは同じだと思います。最近、私はよく言うのですが、子どもたちは学校にほめられるために来ているはずなんです。ところが、どうしても欠点の方が目につくものですから、先生方は、逆のアプローチをしてしまいがちです。ほめられるため、認められるため、成長するために学校に来ているという当たり前のところを、授業などの具体的な関わりを通して、中津の先生方と、いっしょに学んでいきたいと思っています。

■一人ひとりの違いを見つけ育てる

奥塚 私は、長い期間、県庁という組織の中

にいました。その後2年間、民間企業に行きました。その中で、人をどう育てるかという仕事に関わってきました。若い時には育てられ、年を重ねてからは若い人を育てるようになったわけですが、それらを振り返ったとき、自分が受けた指導、自分のした指導の中にも、これはよかったなと思うところと、これはもう少しこうの方がよかったかなと思うところが、正直あります。学校現場は、特にまだ若いこれからの人たちを育てるところですから、一人ひとりの子どもに生きていく力をつけていく、自分からいろいろなことに挑戦していこうという気持ちを育てていく、困難があってもくじけずに挽回しようとする、そういう気持ちを子どもたちがもてるように育てていくことが大切だと私は思っています。

菊池 一人ひとりに、頑張ろうとか、もっとよくなろうと思わせるということは、一人ひとりに違いがあるということですよ。ですから、美点凝視という言葉があるように、一人ひとりの違いを見つけられる教師、違いの良さを見つけられる教師でありたいと思います。そして、その良さを価値付けて、ほめ言葉として贈れる教師が、今後ますます増えていく必要があると思います。クラスの30人の子どもたちを一律に皆同じようにほめるやり方では、一人ひとりとは育たないだろうと思っています。教師の側の観察力が問われると言



いますか、ほめる、価値付けの言葉の力が問われている気がします。

■「らしさ」を「引き出す」教育

奥塚 これまでの人を指導する場面、特に運動クラブなどでは、叱咤して、悪い意味で怒ることが多かったと思いますが、結果を残しているスポーツチームの監督の最近のお話を聞くと、ちょっと違ってきているなど感じます。つまり、良さを引き出して、一人ひとりの子どもをよく観察して、その子の性格を考え合わせたうえで指導し、そして自分自身で考えさせ、プレーさせるというところに重点を置いているような気がします。

菊池 「引き出す」というかたちですよ。一人ひとりの良さを引き出して、「らしさ」をもっと輝かせようとする学校に変わっていくために、教師の側のアプローチの仕方が問われていると思います。私は、講演などでよく話すのですが、「眺める」という感覚でしょうか？心理的にも物理的にもちょっと引いたかたちで、その子の成長を客観的に見取って、次の手をどのように打とうかと考えるわけです。そんな「眺める」という感覚が、

我々教師には必要なのかなと思います。それによって、いい意味で待つことができ、その間に本人は考え、教師はその子の良さが出てくるような言葉かけをちょっとしてあげる、という感じです。ちょっと一歩引いたかたちで、一人ひとりの良さを眺めて見つけ出す、そういう教師の接し方も必要かと思います。

奥塚 なるほど、眺めるですね。ちょっと話題を変えますが、私たちの世代の子どもたちと今の子どもたちを比べたときに、常々すごいなと思うのは、イベントに参加した子どもたちが報道機関からインタビューを受けたときに、質問に対してとても流暢に答えるようになっていることです。昔だったら恥ずかしがって逃げたり、上手に対応できなかったりする子どもたちが多かったのではないかと思うのです。思っていることがきちんと伝えて、しかも表現力があるような気がします。そんな、世代間の違いについては、どのように思われていますか。

菊池 確かにそういう子どもも増えてきたとは思いますが、ただ、二極化しているということではないかと思っています。地域性もあると思いますが、臆することなく自分の思いを表現できる子もいますし、逆にそういうことがまったく苦手だという子も多い状況です。教室の中に30人いると、表現力、家庭環境、考え方、意欲など、デコボコデコボコしているのが、今の学級、学校ではないかと思っています。

奥塚 そういう意味では、先生方にとっては難しい状況になっているというか、先ほどおっしゃった一人ひとりに合わせた眺め方、見方が大切になるのです。

■問われる教師の力

菊池 違いが大きくなってきただけに、教師の力が要求されていると思います。多くの先

生は、自分たちが受けてきた教育のやり方を背負って教壇に立っています。若い時に自分が学んだそのやり方を、今の教室でそのままやろうとしてしまうと、子どもとの関係がちょっと危うくなってしまったり、教室がよくない方向に行ってしまうがちだったりすることがあると思います。

奥塚 「ほめる」ということについてですが、私自身の経験でも、「頑張ってますね」とか、「〇〇をしてくれて非常に助かった」というようにほめられると、それ自体とても心地よいことですし、さらに頑張ろうという気持ちになりました。一方で、ほめられると、ついつい鼻が高くなってしまって、自分はこれでいいんだと勘違いしてしまう。尊大になってしまい、結果的によくない方向に導いてしまうのではないかと考えているのですが、その点はいかがですか。

菊池 おだてるとか、うわべだけのほめ方で、相手をコントロールしようとするのは、「ほめあうまち なかつ」が目指しているものとは当然違うと思っています。確かに、急にほめられると、大人も子どもも一緒に、思わず鼻が高くなってしまうということはあるかと思います。そうではなくて、その子の良さを発見して、価値付けて、公社会に役立つような人間を育てるという方向がしっかりあれば、そして、その軸さえおれば、相手のことも大事だし、自分のことも大事だ、お互いに成長していきましょうと考えることができる人間が育っていくのではないかと思います。いくつになってもほめられたらうれしいというのは変わらないと思います。

奥塚 そうですね。やって見せて、ほめるという教育方法が大切だと、昔から言われています。今回は、菊池先生が中津市の学校現場に入っただけのことをとてもうれしく思い、かつ期待いたします。



菊池 結果を示さなければならぬですから、プレッシャーも大きいですが、がんばります。気になるお子さんも、結局は今の自分がどうなのかということが分かっていないのだろうと思います。自信がないというか、安心できないというか。自分の良さに気づき始めると、落ち着いてきます。そして、他者との関係の中での自分というのがさらに分かってきて、お互いに手を取り合ってもっと良くなろうという関係がくれる人間になっていきます。私は、その意味で、気になる子どもから学びたいとも思いますし、そういった子をどのように育てるかということ、中津の先生方と一緒に見つけていくことが、自分に与えられた大きな仕事だと思っています。

【対談者紹介】

●奥塚正典（おくづか・まさのり）

1953年、大分県生まれ。京都大学経済学部卒。中津市長。大学卒業後、大分県庁に採用され、企業誘致、広報広聴等の仕事に従事。総務部長で退職。2013年、大分航空ターミナル株式会社代表取締役社長に就任。2015年11月、中津市長選挙に出馬し初当選。11月17日に市長就任。